

## 2016 年度後期 数理物理学 II/数理物理学概論 II 12 月 26 日分講義ノート\*1

担当: 柳田伸太郎 (理学部 A 棟 441 号室)

yanagida [at] math.nagoya-u.ac.jp

## 5 頂点代数束

## 5.4 アフィン Lie 代数の場合

$\mathbb{P}^1$  上のアフィン頂点代数  $V = V_k(\mathfrak{g})$  に関する共形ブロックの空間  $C_{V_k(\mathfrak{g})}(\mathbb{P}^1, (x_i), (M_i))$  を考えよう。

記号.  $\mathbb{P}^1$  上の (大域的) 座標  $t$  をとり、 $x_1, \dots, x_n \in \mathbb{P}^1$  を異なる  $n$  点とする。

$\mathfrak{g}$  表現  $M$  と  $k \in \mathbb{C}$  に対し、 $\widehat{\mathfrak{g}}$  表現  $\widehat{M}^k$  を次のように定義する。

$$\widehat{M}^k := \text{Ind}_{\mathfrak{g} \oplus t\mathfrak{g}[t] \oplus \mathbb{C}K}^{\widehat{\mathfrak{g}}} M.$$

線形空間としては  $\widehat{M}^k \simeq U(\mathfrak{g} \otimes t^{-1}\mathbb{C}[t^{-1}]) \otimes_{\mathbb{C}} M$ . これは smooth な  $\widehat{\mathfrak{g}}$  表現なので §3 より  $V_k(\mathfrak{g})$  加群である。

$\mathfrak{g}$  表現  $M_1, \dots, M_n$  に対し上記と同様に定義される  $V_k(\mathfrak{g})$  加群を  $\widehat{M}_i^k$  と書く。ここでレベル  $k$  は共通である。 $\widehat{M}_i^k$  を点  $x_i \in \mathbb{P}^1$  に配置した時の共形ブロックを考えたい。簡単のため  $x_i$  達は  $\mathbb{A}^1 := \mathbb{P}^1 \setminus \{\infty\}$  に含まれていると仮定して  $Z := \mathbb{A}^1 \setminus \{x_1, \dots, x_n\} \subset \mathbb{P}^1$  と定める。次のように制限した共形ブロックの空間を考える。

$$C_V^0(\mathbb{P}^1, (x_i), (\widehat{M}_i^k)) := \text{Hom}_{U_Z(V)} \left( \bigotimes_{i=1}^n \widehat{M}_{i,x_i}, \mathbb{C} \right).$$

補題. 制限写像  $\tau \mapsto \tau|_{\bigotimes_{i=1}^n M_i}$  は次の線形同型を与える。

$$C_V^0(\mathbb{P}^1, (x_i), (\widehat{M}_i^k)) \simeq \text{Hom}_{\mathbb{C}} \left( \bigotimes_{i=1}^n M_i, \mathbb{C} \right).$$

次に  $\vec{x} = (x_1, \dots, x_n)$  を動かしてみよう。共形ブロックの空間に関する諸定義を  $\mathbb{C}$  上のものから

$$\mathcal{B}_n := \mathbb{C}[\mathbb{A}^n \setminus \Delta] = \mathbb{C}[x_i, (x_i - x_j)^{-1}]$$

の上のものに取り換えて考える。また  $\widehat{\mathfrak{g}}(\vec{x})$  を Lie 代数の中心拡大

$$0 \longrightarrow \mathcal{B}_n \longrightarrow \widehat{\mathfrak{g}}(\vec{x}) \longrightarrow \bigoplus_{i=1}^n \mathfrak{g}((t - x_i)) \longrightarrow 0$$

として定める。ここで  $\mathcal{B}_n$  は可換 Lie 代数と知っている。 $\widehat{\mathfrak{g}}(\vec{x})$  は次のような部分代数を持っている。

$$\mathfrak{g}^0(\vec{x}) := \mathfrak{g} \otimes \mathcal{B}_n, \quad \mathcal{B}_n^0 := \{f(t, x_1, \dots, x_n) \in \mathbb{C}[x_i, (x_i - x_j)^{-1}, t, (t - x_i)^{-1}] \mid f(\infty, x_1, \dots, x_n) = 0\}.$$

また簡単のため  $M := \bigotimes_{i=1}^n M_i$ ,  $\widehat{M} := \bigotimes_{i=1}^n \widehat{M}_i^k$  と書くことにすると、 $\mathcal{B}_n$  加群

$$C_V^0(\widehat{M}) := \text{Hom}_{\mathfrak{g}^0(\vec{x})}(\widehat{M}, \mathcal{B}_n)$$

は  $\mathbb{A}^n \setminus \Delta$  上のベクトル束と思える。その  $(x_1, \dots, x_n)$  での stalk は

$$C_V^0(\mathbb{P}^1, (x_i), (\widehat{M}_i^k)) \simeq \text{Hom}_{\mathbb{C}}(M, \mathbb{C}) = M^*.$$

で与えられる。また  $C_V^0(\widehat{M})$  は  $\text{Hom}_{\mathbb{C}}(\widehat{M}, \mathcal{B}_n)$  の部分束である。

$k + h^\vee \neq 0$  と仮定して  $\text{Hom}_{\mathbb{C}}(\widehat{M}, \mathcal{B}_n)$  上の作用素

$$\nabla_i := \frac{\partial}{\partial x_i} - L_{-1}^{(i)*}$$

を考える。ここで  $L_{-1}^*$  は  $L_{-1}^M$  の随伴。  $L_{-1}^M$  が Virasoro 元

$$\omega_{\mathfrak{g},k} = \frac{1}{2(k+h^\vee)} \sum_{a=1}^{\dim \mathfrak{g}} J_{a,-1} J_{-1}^a v_k.$$

から  $Y_M(\omega_{\mathfrak{g},k}) = \sum_{n \in \mathbb{Z}} L_n^M z^{-n-2}$  と展開して得られたことを思い出そう。

定理 5.4.1.

$$\nabla_i = \frac{\partial}{\partial x_i} - \frac{\Xi_i}{k+h^\vee}, \quad \Xi_i := \sum_{a=1}^{\dim \mathfrak{g}} \sum_{j \neq i} \frac{(J^a)^{(j)}(J_a)^{(i)}}{x_i - x_j} = \sum_{j \neq i} \frac{\Omega_{ij}}{x_i - x_j}.$$

但し  $\Omega_{ij}$  は  $i, j$  テンソル成分での Casimir 作用素  $\Omega := \sum_a J^a \otimes J_a$  である。

特に  $\nabla_i$  の水平切断は  $\Phi : \mathbb{A}^n \setminus \Delta \rightarrow M^*$  上の函数  $\Phi$  で

$$(k+h^\vee) \frac{\partial}{\partial x_i} \Phi = \Xi_i \Phi$$

を満たすものである。この方程式を KZ 方程式\*2と呼ぶ。

定理 5.4.1 の略証.  $\nabla_i$  の  $C_V^0(\widehat{M})$  での作用を計算すればよい。  $\eta \in M^*$  を取ると埋め込み  $M_i \hookrightarrow \widehat{M}_i^k = U(\mathfrak{g} \otimes t^{-1}\mathbb{C}[t^{-1}]) \otimes M_i$  に関する持ち上げ  $\tilde{\eta} \in \widehat{M}^*$  が一意に定まる。  $v \in M \subset \widehat{M}$  に対し

$$\left( (L_{-1})^{(i)*} \tilde{\eta} \right) (v) = \tilde{\eta} \left( (L_{-1})^{(i)} v \right)$$

を計算したい。  $J_m^a v = \delta_{m,0} J^a v$  ( $m \geq 0$ ) なので

$$(L_{-1})^{(i)} v = \frac{1}{k+h^\vee} \sum_{a=1}^{\dim \mathfrak{g}} (J_{-1}^a)^{(i)} (J_a)^{(i)} v. \quad (5.4.1)$$

一方  $[\nabla_i, \mathfrak{g}^0(\vec{x})] \subset \mathfrak{g}^0(\vec{x})$  が確認できる。これと  $J^a/(t-x_i) \in \mathfrak{g}^0(\vec{x}) = \mathfrak{g} \otimes \mathcal{B}_n^0$  から

$$\tilde{\eta} \left( \frac{J^a}{t-x_i} \hat{v} \right) = 0 \quad (5.4.2)$$

が任意の  $\hat{v} \in \widehat{M}$  に対し成立する。展開  $1/(t-x_i) = -\sum_{l=0}^{\infty} (x_i-x_j)^{l+1}/(t-x_j)^{l+1}$ , から  $\mathfrak{g}(\vec{x})$  において

$$\frac{J^a}{t-x_i} = (J_{-1}^a)^{(i)} - \sum_{j \neq i} \sum_{l=0}^{\infty} \frac{(J_l^a)^{(j)}}{(x_i-x_j)^{l+1}} \quad (5.4.3)$$

となる。(5.4.2) と (5.4.3) を合わせると

$$\tilde{\eta} \left( (J_{-1}^a)^{(i)} \hat{v} \right) = \sum_{j \neq i} \sum_{l=0}^{\infty} \frac{\tilde{\eta} \left( (J_l^a)^{(j)} \hat{v} \right)}{(x_i-x_j)^{l+1}}$$

が任意の  $\hat{v} \in \widehat{M}$  で成立する。これを (5.4.1) に適用して

$$\tilde{\eta} \left( (L_{-1}^a)^{(i)} v \right) = \frac{1}{k+h^\vee} \sum_{a=1}^{\dim \mathfrak{g}} \sum_{j \neq i} \sum_{l=0}^{\infty} \frac{\tilde{\eta} \left( (J_l^a)^{(j)} (J_a)^{(i)} v \right)}{(x_i-x_j)^{l+1}} = \frac{1}{k+h^\vee} \sum_{a=1}^{\dim \mathfrak{g}} \sum_{j \neq i} \frac{\tilde{\eta} \left( (J^a)^{(j)} (J_a)^{(i)} v \right)}{x_i-x_j}.$$

を得る。任意の  $v' \in M$  に対し  $\tilde{\eta}(v') = \eta(v')$  なので

$$\left( (L_{-1}^a)^{(i)*} \tilde{\eta} \right) (v) = \frac{\Xi_i}{k+h^\vee} \eta(v).$$

□

\*2 V. Knizhnik, A. Zamolodchikov, *Current algebra and Wess-Zumino model in two dimensions*, Nucl. Phys. B **247** (1984) 83–103.

## 6 有理的共形場理論

Bakalov と Kirillov に従ってモジュラー関手とモジュラーテンソル圏を導入し、両者の同値性を述べる。 $C_2$  有限性を持つ有理的頂点代数に付随したモジュラー関手によって有理的共形場理論の数学的定義を与える。WZW 模型についても扱う。

### 6.1 モジュラー関手

記号. (1) 滑らかで連結な複素曲線  $C$  とその上の相異なる点  $\{x_1, \dots, x_n\}$  (marked points と呼ぶ) の組  $(C, \{x_1, \dots, x_n\})$  を点付き曲線と呼ぶ。点付き曲線が安定であるとは  $2g(C) - 2 + n > 0$  の時を言う。但し  $g(C)$  は  $C$  の種数。

(2) 有限集合  $A$  に対し安定な点付き曲線の非連結和と全単射  $\{\text{marked points}\} \xrightarrow{\sim} A$  の組の集合を  $\mathfrak{M}_{*,A}$  と書く。

(3)  $\overline{\mathfrak{M}}_{*,A}$  を  $\mathfrak{M}_{*,A}$  の Deligne-Mumford コンパクト化とする。これは Deligne-Mumford スタックの構造を持つ。

記号. (1)  $D := \overline{\mathfrak{M}}_{*,A} \setminus \mathfrak{M}_{*,A}$  を正規交差因子 (normal crossing divisor) からなる境界とする。

(2)  $D^k \subset D$  を  $k+1$  個の 2 重点を持つ曲線からなる余次元  $k$  の部分スタックとする。

(3)  $N(D^0)$  を  $D^0$  の  $\overline{\mathfrak{M}}_{*,A}$  における法束 (normal bundle) とし、 $N^\times(D^0)$  を  $N(D^0)$  における零切断の complement とする。

定義. (1) アーベル圏の対象  $S$  が単純であるとは任意の単射  $A \rightarrow S$  が 0 または同型であることを言う。

アーベル圏が半単純であるとは各対象が単純対象の有限直和と同型であることを言う。

(2) 直和  $\bigoplus$  を持つ圏  $\mathcal{C}$  に対し、 $\bigoplus_i A_i \boxtimes B_i$  ( $A_i, B_i \in \mathcal{C}$ ) という形の対象からなる圏を  $\text{ind-}\mathcal{C}^{\boxtimes 2}$  と書く。

(3)  $R \in \text{ind-}\mathcal{C}^{\boxtimes 2}$  は同型  $s : R^{\text{op}} \rightarrow R$  であって  $s^{\text{op}} \circ s = \text{id}$  なるものがあるとき対称 (symmetric) と呼ばれる。但し  $(A \boxtimes B)^{\text{op}} := B \boxtimes A$ 。

### 参考書

E. Frenkel, D. Ben-Zvi, *Vertex algebras and algebraic curves*, AMS (2004) の Chapter 6, 9, 10.

B. Bakalov, A. Kirillov Jr., *Lectures on tensor categories and modular functors*, AMS (2001).

以上です。